

A-2. ちょっと来て！泡の色が違うよ！？～友達の考えのおもしろさを取り入れる～ 刈谷市立井ヶ谷幼稚園（愛知県刈谷市）

[4歳児]

1. 友達と一緒に色水の変化を感じる

7月上旬

＜幼児の姿と環境＞ 幼児と一緒にアサガオの種まきや水やりをして育ててきたため、子どもが花の様子を見るようになり、興味をもち始めている。そのため、その花を使って遊べるように、幼児の育てたアサガオや園庭に咲いている花、透明なカップ・ペットボトルを園庭のままごとコーナーに設定する。A児は土や花を皿や鍋の中に入れて「スープ」「ジュース」等と言って遊び出した。花だけを鍋に入れてかき混ぜているうちに、透明な水が花と同じ色に変化している様子から、A児は色水が出ていることに気付いた。その気付きを保育者や他の友達（B児）に伝え、友達も一緒にやり始めた。

＜保育者の願い＞ 発見したことや考えたことを繰り返し行いながら、その思いを友達に伝えたり友達のしていることを取り入れたりして、その楽しさを味わってほしい。

＜環境構成＞ 2人が色水のきれいさを感じとれるように、透明なカップやペットボトルを数多く用意する。その隣に机を出し、その上にいろいろな色の花を子どもたちが選べるように色別にして置く。

実践 「今度は青色だよ」

保育者：「昨日、Aちゃんがお花を混ぜたら色が出たって教えてくれたから、先生もやってみたくてカップ持ってきたんだ」と透明なカップを見せる。

A児：「やりたい」と興味を示す。「Bちゃんもやろう」とそばにいたB児を誘う。

B児：喜んでA児のそばに走っていく。

保育者：「Aちゃんどうやってやったの。教えて！」と尋ねる。

A児：カップの中に水を入れ「はい。この中にお花を入れるんだよ」と保育者に話す。

次第に自分のカップの色水がマーブリングのように徐々に広がったりピンクの色が濃くなったりしていく様子に「すごい。きれい」と夢中になって作り始める。

カップの中の変化を堪能すると、今度は友達のしていることにも目が向き始め、「どのくらい花を入れているのかな？」と眺める。

B児：花を混ぜている。A児のカップの中を覗き込んで、「あれ、Aちゃんはピンクだ。私のは青だよ」と言う。

保育者：B児の思いを受け止め、「本当だ！同じピンクの花をつぶしたけど、AちゃんのとBちゃんの色が違うね」とA児に知らせる。

A児：同じことをしていても違う色がでるということに驚き、「えっ、すごい。どうやってやったの？」と尋ねる。

B児：少し得意顔で「お花をちょっとだけかき混ぜたんだ」とB児なりに考えたことを言う。

A児：「そうなんだ。私も今度は青にしてみよう」と言う。

A児、B児：どの花を使ってどのくらいの水がいるのか、どうやってかき混ぜたのか等の話をしながら二人でいろいろな色を作り始める。



考察

同じことを繰り返すことで、自分の中に確信していくことのため込みをしているように感じた。また、同じ行動の中にも「今度はどうかな？」「やっぱりそうだ」「そうに違いない」と感じたことを確かにしていくことが考えいく力に結びついていると思った。繰り返していく中で幼児が何に気付き、何を発見しているのかを深く読み取っていくことが大切だと思われる。

かき混ぜ方や力の入れ加減で出来た色水の違いに対して驚いたことや発見したことを保育者が言葉に出すことで、より関心をもって取り組むことができていた。何度も繰り返しやってみようと思う気持ちが新たな発見につながるのだと思った。そして、その気付きを周りの幼児にも知らせていくことで、関心をもってやろうとする姿があり、その感じていることを一つずつ認めていくことで、幼児の好奇心につながることが分かった。

2. 友達とのやり取りを楽しむ

＜幼児の姿＞ 自分が作った色だけではなく友達が作ったものを見たり、どうやってやると作れるのか関心をもってまねしたりする姿が見られた。また、ペットボトルに自分の作った色水を入れ、コップに入れては友達にあげたりもらったりしている姿がみられるようになってきた。

<保育者の願い> 新たな気付きをもってほしいと願い、泡遊びの場を色水遊びの近くに設定しておいた。そうすることで泡と色水を混ぜての変化を感じてほしい。

実践 「泡の色が変わるよ」

C児、D児：他の幼児と色水を作っている。

保育者：「Cちゃんの青色の水いいな。先生その色欲しいな」と言う。「いいよ」と言いC児が入れたカップの水を空に透かして眺めて、「Cちゃんのはやっぱりきれいだね」と言う。

他の幼児：他の子も欲しがりそこから色水のやり取りが始まる。

C児：プリンカップの中に水を足して作っていると水がこぼれてしまうことに気付き、近くにあったペットボトルの中に色水を入れ始める。

A児：その様子を見て「ください」と言う。

C児：「どうぞ」とペットボトルから注ぎ、あげる。

D児：たらいに石鹼を入れ泡を作っている。C児の楽しそうな様子を見て、「ジュース屋さんだ」と言う。

保育者：「ほんとだね」と答える。「ちょっとください」とカップを持ってくるD児にピンクの色水を分ける。

D児：分けてもらったピンクの色水を、遊んでいた泡の中に入れ、かき混ぜる。

D児：「先生、ちょっと来て。泡の色が違うよ」と言う。

保育者、D児：一緒に覗き込むと、洗面器の中の泡がピンク色に見える。

保育者：「本当だ。すごいね」と一緒に驚く。

D児：誇らしげな顔で「うん、混ぜたら変わったんだ」と答える。

保育者：色水作りをしている子たちにD児の発見を見せようと思い、D児に「先生そのピンクの泡が欲しいな」と言う。「いいよ」と言うD児からもらった泡を、色水遊びの所に持っていく。

C児、他児：「わあ、すごい」と驚きの顔をし、C児「先生いいな」と言う。

保育者：「D君にもらったんだ」と知らせる。

C児：「私ももらってこよう」と言いD児の所にもらいに行く。保育者が「泡の色がピンクだよ。すごいね」と言うと、C児が「ピンクの色水を混ぜたんだって」とD児の気付きを言う。

D児：(しばらくして) フワフワの泡を作り、カップに山盛りにのせ、「先生、アイス」とうれしそうに持つてくるようになる。

保育者：「おいしそうなアイスだ。桃アイスかな?」とおいしそうに食べる。

D児：また新しいのを持ってくる。

保育者：それを見ているC児に「Cちゃんもいる?はい」と色水の入っているカップに入れる。

C児：「いいね。おいしい」と言い嬉しそうに食べるまねをしている。



考察

同じ遊びを何度も繰り返しやっていくことで、「あれ、さっきと違うな」「今度はどうかな」と少しの変化を感じることができるようになり、その繰り返しが自分の中に確信していくことのため込みをしていると思われる。感じたことを確かにしていくことが、考えていく力に結びついているようなので、幼児が何に気付き、何を発見しているのかを深く読み取っていくことが大切だと思った。そして、それが十分に出来るようになるには友達や保育者の存在が必要で、少し周りに目が向くようになった4歳児だからこそ、気の合う友達とのことで自分の思いを出し相手の思いを聞いていくことでより興味が湧いてくると思われる。

しかし、相手の言葉を上手く受け止めることができないこともある。その時に保育者が媒介となり幼児の感じたことを言葉にして返していくことで、思いを知ることができる。幼児の心の揺れと一緒に感じ、保育者も心を揺らして考える姿を見せるることは、感じ考える力が育っていくためには大切ではないかと思う。

ポイント

4歳児が自分なりの遊び方で素材にかかり、様々なことを感じて楽しんでいます。初めから目的をもって遊んでいるのではなく、「同じ花なのにできる色水の色が違う」「泡にも色水できれいな色が付く」という素材の様々な様子を感じながら、ジュースやご馳走に見立ててその気になって遊んでいます。保育者が寄り添って一緒に遊び、動きや言葉を細やかに受け止めることは、子どもが感じたり気付いたりしたことを生かして遊びを進める支えとなっています。幼児が感じていることを、保育者が理解しながら援助をすることにより、友達と考えを伝え合い、さらに色をよく見たり友達のよいところを取り入れたりする姿が引き出されました。「泡の色が違う」と大きく心を動かす体験により、「もっと作りたい」「もっときれいな色にしたい」「今度はどんな色になるかな」と遊びが展開し、「科学する心」が育まれています。